

考古学特殊研究 国分寺瓦の研究（1）

- ・本論の目的：律令制の萌芽・展開・衰退の様相を、手工業生産組織という側面から概観していく。本論内では特に、この時期の重要な生産物であった瓦を題材に用いることにする。

・瓦について

初源：屋根の構築材として、粘土を焼き締めた物質を使用することは、世界各地で並行的に行われてきた。

E.S.モースの瓦研究。

中国では紀元前 11 世紀、西周早期まで初源は遡る。当初は土管を半裁しただけのものであった。

中国から朝鮮半島を経て日本に入ってきたのは、6世紀末、飛鳥寺の造営に伴って百済から招聘された、4人の「瓦博士」による。

葺かれた建物：日本では当初、仏寺にのみ葺かれた。（寺＝「瓦葺」）

仏教の地方波及と同時に造瓦・瓦葺技術も地方へ広がる。

藤原宮一初の瓦葺宮都。

奈良期には、国衙・郡衙・駅など官営施設も、多くが瓦葺に。

平安期以降、檜皮葺の流行によりやや衰微するものの、その後の仏寺・邸宅・城郭建築などに幅広く使用される。

江戸期の棧瓦（後述）発明以降、一般民家の瓦葺が急増する。瓦はすべての建物において葺材の主流となり、生産も盛んになる。各地で生産される一方、三州瓦・石州瓦・淡路瓦など、生産拠点もできる。

現在一新建材の開発。阪神大震災以降、イメージ悪化。

利点：まずは高級感。（高位貴族への瓦葺・漆喰白壁の推奨）

その他、雨仕舞のよさ。また瓦と同時に造寺技術として導入された、重厚な礎石建ち建物との和合性。

江戸期には、防火の観点から推奨される。

種類：屋根に葺く部位によって、多様な形状。時代が下るにつれさらに多様化。

丸瓦（有段・無段）・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦→基本構成

鬼瓦・鴟尾・垂木先瓦・隅瓦・隅木蓋瓦

熨斗瓦（割熨斗・切熨斗）・面戸瓦

雁振瓦・鳥袞瓦・葺巴・鯨

棧瓦・軒棧瓦

「歴史的名称」と「科学的呼称」の問題。

製作法：瓦の種類ごとに、また時代によって異なるので注意が必要。

言い換えれば、製作法の違いで、ある程度の年代観の推定も可能。

*丸瓦・平瓦（桶巻作り）

- ①タタラ作り：粘土を採取、混和剤となる細砂を混ぜ、直方体の粘土塊を作る。
- ②型木（模骨）の準備：円筒形（截頭円錐形）の型木を回転台の上に乗せ、布を被せる。
- ③粘土板（アラジ）巻付：タタラから瓦2（4）枚分の粘土を、針金を張った弓のようなものを用いて引き出し、それを型木側面に巻き付ける。
- ④叩き締め：刻みを入れ、または縄を巻き付けた叩き板を用いて、粘土の表面を叩き締める。
- ⑤分割：粘土を型木から外し、縦に2（4）分割する。分割の際は、円筒の外（または内）から、工具を用いて粘土厚の半分程度まで切込を入れ、半乾燥させた後、その部分に圧力を加えて叩き割る。
- ⑥調整：分割後の破面や、瓦の両面などを削り、平坦にする。特に古代の瓦は調整を行わない個体も多い。

⑦乾燥

- ⑧焼成：窯で焼かれる。竈窯（登り窯）と平窯。

*平瓦（一枚作り）

模骨の代わりに、瓦一枚分の大きさの成形台に布を敷き、小さめのタタラから切り出したアラジをその上に乗せ、叩き締める。
桶巻作りに比べ、工人の熟練を必要としない技法である。

*軒丸瓦・軒平瓦

一般的には、「筥」とよばれる木型に粘土を押しつけ、瓦当部を作り、その後、丸瓦や平瓦を後ろ側に接合し、接合部に補強粘土を張り足して作る。
一枚作り軒平瓦の場合、成形台の上で軒平瓦の形を作ってしまう、その状態で筥を横から押し当てて作るものもある。

*粘土紐巻き上げ技法（丸瓦・桶巻作り平瓦）

型木・模骨に、粘土板の代わりに粘土紐を巻き上げていき、瓦を作る技法。
その他の工程は粘土板作りと同じ。 陶器の作り方に似ている。

*一本作り軒丸瓦

丸瓦部と瓦当部を一気に作り出す方法。型木の側面だけでなく広端面にも粘土を張る方法（縦置型）と、特殊な成形台を用いる方法（横置型）がある。
接合式に比して、瓦当と丸瓦が剥離しにくいと言われている。
後者は一種の型作りであり、一枚作り平瓦同様、非熟練工に対応したのものとも考えられる。